

広州日本人学校における文集『穂学』の実践

前広州日本人学校教諭

福島県南相馬市立原町第二中学校教諭 諸井 美香

キーワード：在外教育施設、広州、国語科指導、学校文集

赴任校の概要（2021年3月12日現在）

学校名・日本語：広州日本人学校

学校名・現地表記：広州日本人学校

URL： <http://www.jsjgcn.com>

1. はじめに

広州日本人学校では毎年小学部から中学部までの児童生徒の文集「穂学」を作成している。在籍している児童生徒が授業で書いた生活作文や意見文を編集、掲載し、年度末に発行するのが毎年恒例となっている。全学級の作品を掲載するため、文集「穂学」の編集には、かかる指導や時間も大きい。実際のところ、卒業する児童生徒にとっては卒業文集のような役割があり、また転学する児童生徒には記念として残るため、単なる文集以上の意味をもつ貴重な作品集になっている。そこで、私はこの文集「穂学」の作成と編集を通じた実践について紹介したいと思う。



2018年、2019年、2020年版の「穂学」（中学部）

2. 広州日本人学校、児童生徒作文集「穂学」

(1) 広州の学び「穂学」

「穂」とは「廣」、つまり広州を表す言葉であり、

「広州での学び」を表す。簡潔で単刀直入、明快な

題名である。広州での生活の学び、成長を著す文集という意味ではこれほどの的を射た題名はない。

「穂学」は小学1年生から中学3年生までの全校生の生活作文、意見文などをまとめた文集である。国語科担当が年度当初に起案して、主に国語の授業で計画的に取り扱い、指導する。12月から1月にかけて取りまとめ、年度の総括である3学期に発行して3月には児童生徒に配付する。広州日本人学校では恒例の教育活動の一つとして毎年取り組んでいた。運動会、学習発表会、国際交流行事を初めとする主な行事が一段落する11月から12月にかけて清書をし、実際の作品を完成させる。その後広州市内の印刷業者との打ち合わせをし、大型連休の春節前には大方の作業を終える日程を組んで全ての原稿を準備する。中国では春節によって国民全体が休業に入る。そのため前後1ヶ月ほど業者の工場が止まるという事情、学校も例年3学期が特に短いという状況がある。帰国する児童生徒もいるので、こうした諸事情から「穂学」は多くの教職員、現地事務職員に協力してもらい完成できるのである。

寄せられる児童生徒の作品は広州生活や学校での体験から得た小学生の素直な驚きや発見、多感な中学生の広州生活を振り返った日々の思いや考えなどがそのままに述べられている。

(2) 小学部の作文指導を通して

① 小中一貫校における文集の作成

「穂学」はかつて全作品を1冊にまとめていたが、児童生徒数の増加により小学部低学年、中学年、高学年、中学部で4冊に分冊した。学級ごとに目次を作り、学級のページ、生徒の集合写真を入れて作文を編集するようになった。

最初に、原稿作成の手順と原稿用紙の使い方、作文のきまりなど基本的な内容を周知するために全体研修で行い、各学級担任、学年で作業に入った。推敲のとき、私は小学部児童の初稿の作文原稿を読んで、話し言葉と書き言葉の区別、その認識が難しいことを実感した。また、広州日本人学校には日本語習得のうえで書き言葉に支援が必要な児童生徒がいることから、文法以外でも日常の言葉を書き言葉にすることが容易でない作文もあった。小学部作品の推敲については、担任以外の先生と私が直接指導したり、入稿前に作文の校正を行ったりして、必要に応じて赤字を入れながら私は全学級の作品に目を通した。担任以外の先生方にも原稿チェックをしてもらい、小中一貫校だからこそできる協力体制と指導を行うことができた。

② 書き言葉、作文におけるつまずきと課題と考察

基本的な原稿用紙の使い方では、拗音、促音、句読点のマスに入れ方、改行などのマスの使い方、かぎカッコ、数字の書き方などで誤りが多かった。学年によって学習の習得状況が異なるので、随時各担任には文章事例を提示して指導してきた。例えば、小学部1年担任は指導した原稿を一度家庭に持ち帰らせて保護者も見直し、個別指導により書き取りにも時間がかかっている作品に誤りが少ない。むしろ、中、高学年に上がるにしたがって書き言葉でない文章や話し言葉そのままの表記が目立った。他者との関係性を理解し書くときの相手意識や目的意識をもてない、書く活動に反映されていないということである。文法の誤り、不適切な主語と述語の関係による文の軸のねじれ、平仮名ばかりの文章なども多くみられた。これらは、日常語の知識不足からくる語彙力の影響、言語習得に関わる生活経験の乏しさ、特に学習でもICT活用の増加にともなう書く活動の減少も要因と言えよう。

授業での作文指導に限らず、日頃の文章を書く一人ひとりの習慣が表現の技術と思考を形成していく。気になるのは、担任がみている誤りを指導していないか、そのまま看過している例である。これには担任の指導観が出ている。鋭い洞察と細やかな指導が、学習の基礎となる国語力の形成を促す。学年にふさわしい基礎学力、技能をもとにその学年や発達に応じて表現の豊かさを鑑賞したり指摘したりできる力を身につけさせられれば、より高いレベルの確かな表現が可能となるはずである。

③ 小学部から中学部への課題

小学部は低学年ほど原稿に起こして書くことが難しいので、早くから準備し、取り組んで時間をかけ、授業での担任教師の指導や家庭での手解きが行き届いていることがわかった。特に1年生にとっては、書きたいことの説明やその書き取り、さらに原稿用紙に書くための制約など形を整える条件が多い。こうした児童の国語力や指導の様子を了知することができた。このような小学部でのつまずきや課題は、中学部の生徒たちのつまずきの根底にもある。日本語習得に欠落している実態が段階的に把握できたとし、原稿作成から完成までに、各学年の系統的な内容と書くうえに必要な共通の指導事項と課題が明確になった。また、書く技術面だけでなく、どういう題材のどの事柄を焦点化して書いているかその心の変化を読み取ることにも意義があった。学校生活、家庭生活の中の自分を自省し、その思いを新たな場面で生かす心境に近づくことができたからだ。小学部の児童の友だちとの会話、校外学習での発見、学習発表会や運動会での頑張りを誇る気持ちなど直接的に伝わってくる感動もあれば、思春期只中の心の葛藤を表現する中学生作品にも感慨深いものがある。

(3) 中学部文集の作成における指導と作品から

①テーマとその内容

中学部の穂学作品は、3年間とも1年生「成長」、2年生「挑戦」、3年生「躍進」というテーマに則って選材し書いた。題材は自由だが、完成した作品の内容を大別すると、学習、生活、部活動、習い事(趣味)、自己内省、自分の成長、国際交流・異文化理解、学校行事(運動会、学習発表会)、委員会活動、友情、宿泊的行事、将来の夢等である。1年生は小学校、小学部との比較、新たな中学校生活での経験、テストや部活動、生活の変化の中で自分の成長を具体的に表現した生徒が多い。中学部の特徴として特別活動や中学部のほとんどの活動が2年生を主体とするので、2年生はリーダーや中核的な役割を担う立場から自分が悩みつつ得た達成感や成功体験、または学びの体験を書いた生徒が多かった。自分を客観視しながら集団や社会において役割を担う自己意識の芽生えがみえる。学級、中学部の中での自分の果たすべき役割や海外で国際的に生きようとする自覚が深まっている。3年生はこれまでの義務教育や海外生活での自分を振り返って、あるいは自分の出自についてのアイデンティティを見つめる生徒、中国や海外生活の中で得た感慨を書く生徒、いずれにしてもこれをきっかけに日本や海外など新たな生活環境で将来を夢見て旅立つ決意のような思いがある。3年生にとっては中国での生活、友だちとの決別、または飛躍の覚悟が著された文章である。まさに卒業前に最後に書き留める文章としては、日本の卒業文集の作文よりも感慨深い内容になっている。また、指導する側からすれば、一人ひとりの意思や感慨を著すにふさわしい場とする必要がある。

②作成に関わる活動の意義

書く手順は、まず下書きした後、生徒が班ごとに回し読み添削を行う。そして、次の班の文章を一斉に読んで推敲する。これを繰り返して全員の作文に目を通し添削する。修正し終わった原稿から清書する。相互修正によって直された表現、批評の書き込みを読み、自分で判断し表現を選択してまとめる。最後に、教師が目を通して準備が整った生徒から清書原稿に鉛筆書きしてペン書きをした。

互いの文章を読み合う過程で感心したのは、生徒たちがそれぞれの作文に共感し合い、あるいは疑問を呈し、自分の作品同様に友だちの作品に関心を寄せ、よりの確で伝わる豊かな表現になるか悩み話し合っって作品を作り上げていったことである。総じて生徒たちは作文の内容を何度も書き換えたり、じっくり考えて再度深めて書いたりした。また保護者をはじめ多くの人が目にする文集であることもあって、中国生活、海外生活数年間の自分を省みる記録となっている。一人ひとりが自分を見つめようとする真摯な態度と自分の意見や考えをできるだけ正確に書こうとする向上心が大いにみられた。生徒たちは自分の書きたいことに対する自分の世界観をもっているが、文章力を高めたい、誤りは極力正してより自分の伝えたい内容を適切に表現する言葉を選びたいという思いが伝わってきた。それに、海外生活での苦楽を知る仲間だからこそ寄り添った助言が生きていることを痛感した。

③実際の作品にみる生徒の成長と意見形成

日本語が不自由な生徒に関しては、他の生徒より個別指導に多くの時間を費やし、段階的に指導を行った。1年生のある生徒は、日本語を習得するためにインターナショナルの現地校から広州日本人学校に転入してきた。初年度は味わった言語の壁と学習の困難があったが真剣に学習に取り組んでいることを書いていた。このときは文のねじれと日本語の語尾や語彙の言語感覚のずれを指導した。国語の授業について文法の授業が全然わからなかった、と書いていたが、彼はひとつひとつの間違いを正すのに面倒がらず根気よく考え、語の意味の違いと語句の選択にも納得してから進み、書き終わったときにははっきりとした表情をしていた。今年の彼の作品には苦手なスピーチについてみんなの前で発表することにおびえを感じていたが、自分の努力が報われ上手くできたこと、克服の喜びを感じたと書いていた。文章の直しがほとんどなく、1年間の向上が表れていた。

インターナショナル現地校から転校してきた別の2年生の生徒は、「国際人としてのスタート」と題して広州での成長を2点挙げ、「多様性を受け入れられるようになったこと」「日本人としてのアイデンティティを確立できたこと」と書き、「日本人学校へ転校したことで改めて日本の良さに気づいた。

(中略) 協調性があり、勤勉で、計画的に物事を進められるのは日本人の強みだと思う。その発見は日本の外の世界を見たことで生まれ、日本人としてのアイデンティティの確立につながった」と延べ、このあと日本人としての美德を失わず、国際性を生かして生きたい、としている。

最後に私が最も印象深かった生徒作品を挙げたい。2つの祖国をテーマに、「この9年間、日中の混血児である私はもう1つの祖国である中国で日本人として過ごしてきた」という書き出しから中国人と日本人の国民性を比較し、「日本では言葉を使わずに意思疎通する。しかし、中国にはそのような文化はない。彼らは直接的な表現で自分の考えをはっきり述べることを好むため、回りくどい表現は使わないようにして自分の意図を正確に伝える必要がある。(中略) 些細な慣習の違いから歴然たる文化の相違までの全てを正確に理解することが大切だ」と延べ、これから自分がこの2の国をつないでいく存在になるべく努力したいという志を書いていた。このように義務教育から脱却し、新たな進学に向けて、これから社会にどのように関わっていくか理想と展望を書いていた生徒も多くあり、普段は書かなくともこの文集ならではの作文が集まる。学年が上がるにつれて、夢を実現するべく具体的な目標を掲げ、より現実を捉えた書きぶりになって進化していくのも頼もしい。こうした生徒たちの率直な意見は日々の生活の積み重ねから育まれていくものである。

派遣の最後の年度は、特に新型コロナウイルスの蔓延で日本に1度帰国し長い待機の後、帰ってきて作文にそのときの生活の苦労や不安など心境を綴っている生徒が多く令和2年度文集の特徴である。コロナ感染症の影響で学校での行事や校外活動、交流活動、部活動などが制限され、帰国を余儀なくされた生徒も多く、文集の形態や作品の内容も大きく変化した。

3. 終わりに

帰国子女の児童生徒たちが日本の学校で学習し学ぶとき、その違和感はどこから来るのかという疑問から、実際に本校で国語の授業を通してその学習や生活の様子、物事に対する考えなどを探ってきた。それはここでは紹介できなかったが、生徒たちの真摯な言葉に彼らの生きた声が表示されていた。特に作文や意見文、小論文指導のなかに表現されていてほんとうに興味深いものであった。

本校生徒の特徴として、人間関係のつながり、友情、挫折からの自己内省を描くことが少ないように思う。しかし、生活感情を見つめ直すという意味では、多様な経験とそれが生み出すさまざまな感情をかみしめ、現実を受け止め判断すること、関わる自分や他人を洞察し、正しくあるべき姿を模索するなど、心の成長が見て取れる。また、毎年の成長を追って比較し、表現の向上や思考判断の成長の様子を文章から考察できる。このように普段言葉にしない心の懊悩や細やかな生活感情、心の変化をいきいきと描く児童生徒たちの作文に携われたことは、国語教師の何にも代えがたい喜びであり、生徒理解の一端であるが、ほんとうに貴重な機会だったと感じている。日本でもまたさらに生徒の心に寄り添った作文指導を行っていききたい。3年間携わってきたが、その意味でも貴重な機会だった。